

弘法さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-kouhei.org

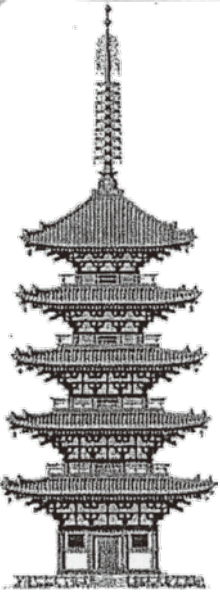
皆さん、こんにちは。いよいよ春本番。平成最後の月となりました。季節の変わり目です。くれぐれもご自愛ください。

今年**は実録・覚王山日泰寺縁起**をお伝えしています。世界的に**本物と認められている仏舍利(お釈迦さまのご真骨)**がなぜ日泰寺に祀られたのか。その歴史です。

★稲垣満次郎

一八九八年(明治三十一年)、インドとネパールの国境近く、ピプラーワーという場所で本物の仏舍利(お釈迦さまの骨)が発見されました。
翌一八九九年(明治三十二年)、仏舍利は**仏教国のタイ(当時はシャム)**の**チュラロンコン国王**に寄贈され、タイ国民は歓喜してこれを迎えました。

チュラロンコン国王は寄贈された仏舍利を分骨し、同じ仏教国のセイロン(現在のスリランカ)、ビルマ(同ミャンマー)にも寄贈しました。タイでのこの出来事を注視していた日本人がいました。初代駐タイ公使、**稲垣満次郎**です。



稲垣満次郎

稲垣は肥前(長崎県)平戸藩士の家に生まれ、維新後に日本

のアジア外交策を説く「東方策」という論文を発表して注目を集めていた外交官。

一八九七年(明治三十年)、**日タイ修好条約締結**に伴ってバンコクに日本公使館が設置され、稲垣が初代公使に抜擢され、着任していきま



日本暹羅修好通商航海条約

た。当時のアジアでは日本とタイは数少ない独立国。稲垣は両国の友好関係が深まれば、欧米列強のアジア進出の歯止めになると考えていた。

たようです。
一九〇〇年(明治三十三年)一月二十七日、稲垣はタイ外相**テークワン・ワロパカーン親王**に日本への仏舍利分骨を願う書簡を送りま

した。
テークワン親王はチュラロンコン国王の弟。条約締結交渉以来、稲垣とは親しい関係にあったそうです。
二月一日、早くも親王から稲垣に返書が届き、二つのことが書かれていました。

ひとつは、チュラロンコン国王は分骨を認め、日本からの仏舍利奉迎使を受け入れること。
もうひとつは、この分骨は日本仏教界全体に對するものであること。



青木周蔵

日本仏教界が宗派の垣根を越えて協力することを望んでいました。



大隈重信

二月十四日、稲垣は日本の外相と各

宗派管長宛に経緯を伝える書簡を送り、タイ国王から仏舍利を拝受する奉迎使節団の覇権を要請しました。
稲垣はこの時、自分を公使に任命した**大隈重信**前外相にも書簡を送付し、大隈は稲垣の動きを側面支援し、日泰寺創建時には木材を寄付しています。

★仏教復興

ところで、その当時の日本の仏教界はどんな様子だったのでしょうか。
一八六八年(明治元年)、**神仏判然令**が發布され、**廃仏毀釈**が始まり

ました。
福沢諭吉は自著の中で「維新の初めに廃仏の議論を聞いて僧侶の狼狽甚だし」と記しています。



福沢諭吉

そうした動きに對して、各宗派は対策を乗り出し、最も迅速だったのは東西本願寺。金策に苦しむ明治政府に資金を融通して懐柔しました。

また、各宗派は欧米諸国に使節団や留学生を派遣し、欧米宗教事情を参考にして日本仏教の改革と復興を企図。政府に数々の建白書や論文を提出しました。

こうした努力もあって、**一八七五年(明治八年)**には**信教の自由保障の口達**が發布され、信教の自由が確立。

それ以降、各宗派は教育機関等を整備。**一八九六年(明治二十九年)**、**東本願寺の真宗大学**(現在の**大谷大学**)開学。**一九〇〇年(明治三十三年)**には**帝国仏教会**が組織されました。

ピプラーワーで仏舍利が発見され、日本への分骨が決まったのはまさにこの頃。当時の仏教界にとっては**仏教復興**に寄与する朗報でした。

★石川舜台

稲垣の要請に強い関心を示し、いち早く呼応したのは、**東本願寺(浄土真宗大谷派)**の実力者、**石川舜台**参務でした。
来月は**仏舍利奉迎使節団**が結成される経緯をお伝えします。乞ご期待。